

# 現地にみる欧米の幼児教育



莊 司 雅 子

私がこのたび海外に参りました直接の目的は、ノルウェーのオスロで開かれました、「第三回国際大学教育研究会」に出席するためでございました。日本からは東大の海後宗臣氏と私の二人が学術会議から参加しました。この度の参加国は自由主義国だけでなく、ポーランド、ルーマニア、ハンガリー及びソ連などの共産主義国からも出席し、活発な議論が交されました。

この機会を利用して、会議終了後、私は長年希望していた、ヨーロッパ各国の現地における教育施設を見てまわりました。

日本の羽田から北極を経てからデンマークのコペンハーゲンに向かい、そこに一週間滞在し、次にノルウェーのオスロへ行き、会議に出席したのです。オスロからスエーデンのストックホルム、フィッランドのヘルシンキへと北欧四カ国に最初の二カ月即ち昨年の八月いっぱい滞在しました。それからオランダ、ベルギー、フランス

へ行き、次にイギリスへ渡り、十一月下旬、アメリカに向かいました。そして今年の四月末再びヨーロッパにもどり、スイス、オーストリア、ドイツ、イタリア、ギリシア、エジプト、パキスタン、インド、タイ、香港、台湾の各国をまわって、この七月、一年ぶりで帰国しました。

これらの国々でそれぞれの幼稚園、保育所、小学校、中学校、高等学校、大学、その他社会教育と全般にわたって教育施設を見て歩きました。今日はその見たまま聞いたままの一端をお話し申し上げます。と思います。まず、イギリスやドイツそして北欧の幼児教育をアメリカのそれと比較しながら申し上げたいと思います。

ヨーロッパからアメリカ、そしてまたヨーロッパへとまわってみて、特に感じさせられたことは、幼児教育に及ぼす財政上の問題がいかに大きいかということでありました。幼児教育の歴史はヨーロ

ッパの方がはるかに古いが、しかしそれを今日のような発展へもって来たのはアメリカであるということが出来ます。そして、それは特に財政的裏付けが十分にしていることだということを知らされました。

ヨーロッパで、アメリカに劣らず、国の力で組織的に幼児教育を行なっている国としては、社会保障制度が立派にしかれている国、デンマークとスエーデンです。

「スエーデン」

スエーデンの児童はみな、あるちゃんとした施設に所属しているのです。たとえば――

零才――七才 Health Centerで児童の健康は国の保護を受ける。

七才(学令)――十八才 学令期の児童のための School Health Centerがある。

七才――四十才 Dental Care(歯の健康)

七才――(学令期) 教科書……無償

七才――(学令期) School Meal……無償

ここで感心したのは公立の幼、小、高からすべての公立の教育施設では昼食が無料であることです。もちろんこれは希望によりとらなくともよいのですが。スエーデンでもう一つ非常に特色ある教育施設として“Play Ground System”があります。一才半――十五才までの児童のための遊園地です。市内の方々にあるのです。交通のは

げしい所にも、鉄柵でかこまれてちゃんと遊び場が確保されているのです。内部では、年令順に子どもの遊び場が区別され、しかも専門の遊びの指導者が居て子どもの遊びを指導したり励ましたり、計画したりするのです。指導者には市の方から給料が出て、子どもに理解をもった人があっています。

幼児教育の施設としては、Day Nursery SchoolとPlay School(幼稚園のこと)と放課後の子どものための Afternoon Schoolがあります。

Day Nursery Schoolは働く母親の子どもを一日中あずかるためのもので、三カ月――七才までの子どもが入れます。Play Schoolは四才――七才までの子どもが入ります。母親が働いていてもいなくても一日の一定時間だけ保育する幼稚園のようなものであります。

Afternoon Schoolは放課後教育といったもので、子どもが小学校に入っても、母親が働いているために、家に帰ってもひとりぼっちになるので、そういう子どものためにあるものです。その他青少年クラブや年長児童のための Youth Centerなどがあります。ですから子どもたちは、行くところなくぶらぶらすることがありません。この放課後教室にも、専門家がいて子どもを指導しています。ですから子どもたちには、不良化するような余裕がないわけです。これらの施設はいずれも国や地方自治体が、直営したり、補助金を出したりしています。スエーデンの、ある Day Nursery(一日

保育所)の組織を御紹介申し上げます。

生徒——一才の子ども六人—One Section

一才——二才の子ども六人—

二才——三才の子ども十二人—

三才——五才の子ども十五人—

五才——七才の子ども十五人—

職員(児童五十四人につき)——

計五十四人……定員

園長

一人

nursery school teacher (教師)

二人

nurse (保育)

四人

cook (料理人)

一人

cook-assistant (料理人のお手伝い)

一人

家政婦

二人(時間払)

visiting doctor (医師)

一人

計十二人

これだけのスタッフです。どうですか。

児童一人について出される年間費用を尋ねてみました。一人あたり三千四百クローナ(一クローナは日本の八十円に相当)約二十四万円、国が六パーセント、地方自治体が七十四パーセント、あとの二十パーセントは親の収入に応じて補なわれます。なお苦しければ免除されます。これにくらべて日本は一日一クローナ(八十円)以下です。

Play School (幼稚園)は四才——七才の子どものためのもので一日約三時間保育します。主としてしつけと訓練で純教育的な施設です。児童数は一グループが、多くて二十人。四十人いたなら午前二十人、午後二十人という方法をとりまします。教師は一グループに一人、それに必ず助手が一人つきますから手がとどくわけです。

スエーデンの模範的な保育所を一つ見せていただきましたが、保育のための施設も実によく整備されていました。その施設の訪問者名簿にサインを頼まれた時、日本の議員団の名前が目にとまりました。日本の議員もこうした、模範的施設を見てないわけではなく、ちゃんと見ていることがわかりました。ただ、こういう人たちは日本に帰って、議会に見たことを報告しているかどうかたいへん疑問に思いました。

「デンマーク」

この国はスエーデンとよく似ています。ノルウェーやフィンランドはそれほどではありません。やはり一国の政治経済はその国のすみずみにまで(保育所のすみずみにまで)影響しているものだといいこと、その国の経済は、その国の歴史や文化に大きく影響されて来ているのだということがこうしたさまざまな国の現状を見て感じられました。スエーデンは実によくどこのついで、しかも経済的に豊かな国です。——それは第一次大戦にも第二次大戦にも中立を守ってきたためです。デンマークはスエーデンほど豊かではありません。

せんが、伝統的に社会保障が確立しています。それは妊婦に支給するミルクから埋葬費の補助まで保証されています。託児所、幼稚園および放課後学校などは法律で定められています。これらは地方公共団体が直接に経営するか、補助金を出すようになるか、

託児所 生後——三才  
幼稚園 四才——七才

経営費の負担 四十六パーセント——四  
三十一パーセント——地方

放課後教室(義務年限内)——経営費の負担 四十五パーセント——四  
二十五パーセント——地方

以上のように定められております。コペンハーゲンで私が見たものにこんながありました。託児所と幼稚園と放課後教室が、建物は別々ですが同じ構内にあります。託児所の保母は住み込みで二階に住み、その下が子どもたちのへやになっておりました。保母の衣食住は一切無料です。そして初任給は、一年の教育を受けた者が約六百クローネ(約三万円)二年の教育を受け一年間経験のある者が千クローネ(約五万円)だそうですが、それでも安すぎるということでした。保育所の内部は何しろ清潔で静かであるでホテルのような感じで、子どもの泣き声も叫び声も聞こえません。保母が泊りこみでいるから、日本のように交通ひんばんな所を通う必要もないので疲れる量がずっと少ない。したがって十分に子どものめんどうが見られるということになります。託児所、幼稚園の職員数は、次のようです。

保母、一人 助手一人——乳児八人

教師、一人 助手一人——幼児二十人

参考までに、幼稚園では文字や算数は計画的には全く教えておりませんでしたが、ヨーロッパではどの国でも教えていないようです。

ヨーロッパを通じて感じたこと、日本の学ぶべき点としては「教師養成」の問題があります。ノルウェーで聞いたことです。託児所の先生になるにも幼稚園の先生になるにも、教師養成の大学に入らなければならないのですが、日本と違ってその大学に入るには半年の現場の実習と半年の家庭での実習、合わせて一年の実習経験をしなければならないのです。見習い月間は半額の給料が支給されます。このように十分な経験と豊かな教養をもった専門家だけが幼児教育にあたっているのです。

オスロにある公立幼稚園で職員の間で働いているようすを見て来ました。郊外にある小高い丘の上の赤い屋根の家でした。そこは二百年前からサナトリウムであったところをゆずり受けて、五年前に幼稚園にした建物です。二棟あり、一方は保育所、他方は幼稚園です。

Nursery School は朝七時半——夕五時半まで、働く母親のためにあるもので、母親は、月に五十クローネ(約二千五百円相当)払います。児童四十人に対して教師が二人、助手が一人います。

他の棟は普通の幼稚園で十時半から午後二時までで、一階が三才から五才、四十人、教師が二人、助手一人、二階は五才から六才、二十人、六才から七才、二十人と二クラスになっています。一クラ

スは二十人で教師が一人です。二十才以上にならないと教師にはなれませんが。教師と子どもたちのようすを見てみると、教師は日本のように何から何までひとりでするのでなく、純粹に教育にあたっている、つまり、子どもたちといっしょに遊びながら、その中で指導しているようでした。環境をととのえる仕事は、見習いの者が全部しておくようになっていました。教師の資格のある者は、最低千クローナ(約五万円相当)が支給されます。それでも、一般的にみて低い方だと、賃上げ運動をしているということでした。一方、教師たちは幼児教育向上のために毎年研究を重ね、その面にも誇りをもつて励んでいます。

スエーデンの制度のところでも申し上げなかった休日の過ごし方についてちょっとつけ加えますと、夏休みなどには別荘へ行く子が多く、そこへ行くための費用は全部無料です。個人の別荘がない子には Holiday Camps があり、勿論そこへ行く交通費も無料です。要するに、休みになれば休みで青少年にはまた行く所があるのです。

### 「北欧の町づくり」

ヨーロッパで再び感心させられた点、それは町づくりです。

日本にいた時は騒音などあまり気になりませんでしたが、向こうはとて静かですので、こんど戻ってみると雑音が耳についてなりません。向こうの町は静かです。家で仕事をして疲れた時、ちょっと外を散歩すると身体が休まります。あまりきれいな

で、ごみを捨てるなど、はずかしくてできないほどです。至るところにベンチがあり、道路の両側に花壇があります。また至る所に緑地帯や公園があります。非常に気持がよく、植木鉢で町をきれいにしている所もあります。電信柱にも花をぶらさげ、家の窓にも花を植えて、みんなで町全体をきれいにしています。すでに幼稚園、保育所で訓練されているからです。花をつむ子もいないし、方々に鳩や雀の群かいて、人が行くと向こうの方から飛んで来ます。

ミュンヘンの公園で、こんな光景を見ました。おばさんがハンドハックを開いて、しきりに何か出しています。おばさんはバックから小鳥のえきを出して小鳥たちに与えているのです。パブコロンを小鳥にやっているのです。私は「なるほど」と感じました。町づくり、人づくりの秘訣がこんなところにあるのではないのでしょうか。

次にフィンランドやオランダなど、世界でも人口密度の高い国々はどうでしょうか、申し上げたいと存じます。

### 「オランダ」

アムステルダムから三十分程行くとライテンという所があります。友人の案内でライテンの幼稚園と小学校を見ました。環境は子ども自身に白らいろいろと遊はせるようになっています。幼稚園では、やはり文字を教えず、英国式に Infant School とよんでいます。人口が多いため、一クラス四十人です。クラスの中に、砂場、粘土箱などがとりつけられておられます。

これは、この国が手先の細かい仕事の訓練を重視しているからです。アメリカと比較して、オランダ、ヘルギー、フランス、ドイツの幼稚園では、大きな道具を使うことより、細かい道具を相当使っているのに気づきました。アメリカは大きな筋肉の訓練を重視し、これらヨーロッパは手先の訓練をも重視しているのです。

「フィンランド」

ヘルシンキでは、世界的に有名な「Children's Castle（子どもの城）」を見学いたしました。それは「Hospital Only for Childrenで、子どものための立派な病院、文字どおり『子どもの城』です。戦前から始められ、戦後に完成し、乳児、幼児、児童と別々に分けてあります。そして、中には保育所など幼児に必要な教育環境が用意されています。この病院では、母親から完全に難して完全看護を行っています。保母訓練もここで行なわれています。

「イギリス」

英国は五才から義務教育です。五才から七才までが「Infant School」です。早くからいろいろ教え過ぎるという批判が今でも行なわれています。学校は、すべてカトリック系とプロテスタント系のどちらかに、地区によって決められています。私は、はじめスコットランドのグラスゴーに行き、そのプロテスタント系の学校を見ましたが、なかなかきびしく、「Infant School」でも普通の小学校のようにきちんと並べていました。私は九月の下旬から十月二十五日まで

滞在しましたが、その間に新聞の論説で、五才から一斉教育では早すぎないかという意見が出ておりました。そのように英国でも、最近は何種々の議論が出され、大分新しい方向に向かい出したようでした。

一カ月あまりの滞在でいろいろなタイプの学校を見せてくれましたが、ロンドンで紹介されたところは、だいたい新しい行き方をしていました。ある小学校の校長さんは、得意そうに説明してくれました。「英国は早くから能力別にすることが多すぎる。私はそうしない」と。英国では教育内容からカリキュラムの構成まで一切が校長の一存でよいのです。それだけに自分の学校は他と違ってこんなふうだとその特徴を強調して、見せてくれるのです。見ると、そこはマンチェスターやグラスゴーとは大分違って（写真をくれました）五才児から読み書き算数を教えるというようなことはせず、アメリカで以前からされているように、なるべく子どものもっている能力を発揮できるような機会を与え、経験を豊かにするという方向に向かっているようでした。だが、英国には厳格な試験制度があり、そのために小さい時から訓練される必要があるのです、なかなか新方向にきりかえにくいのです。十一才で試験があり、

- ① 二十パーセント Grammar School
- ② 十パーセント Technical School
- ③ 七十パーセント Modern School

というふうに分けられます。①に入れば将来大学へスムーズに

入れ、③は平凡人で、卒業すればそのまま家庭や事務職などについてしまう人の学校です (Public School) 私立には普通、教会の特殊な宗派の専門家を育てるから全体の五パーセントぐらいが入る程度です)。ただ十六才の時にもう一度①や②の高等教育を受けるための機会 (試験) が与えられます。しかし、いったん十一才の時に落ちるとなかなか入れなくなるそうです。

このような試験制度から来るへい害を是正するために、Comprehensive School 総合学校を作ろうという向きが見られるようになりました。ロンドンのある Secondary School の校長さんは、言っていました。「学校を大きくして、校長も共通にし、そこに Grammar School も Technical School も いっしょに一つの学校の中におけば、子どもたちにも移行の機会が多くなる」と。

英国でも、今までの行き方を是正し、単にかたよった専門家だけを育てるのではなくて、もっと幅のある、広い教養をつんだ人を早くから育てようとはじめているようすでした。

五才以下の、ある公立の Nursery School を見ました。大きな古い丸太やバスの古いものをもらって利用して遊ばせていました。何から何まで子ども自身にさせていました。食事の時を見ましたが、食事を配るのも、みな年長の子どものお当番がちゃんとやっていて教師はじっと見ているだけでした。日本のように、朝から晩まで子どもを休みなしにお話し歌し今度はお絵かきし次は自由遊び、など

とひきまわさない。必ず休ませる時間をとっています。休息の時間があり、ひとりひとりに折りたたみ式ベッドが用意されています。

イギリスでも、最近子どもをひっきりなしにかりたててくるのではないよう、よく考えられております。十年前にアメリカで見たのですが既にひとりひとりのベッドがありました。さすがに財政豊かな国だからでしょう。

「ドイツ」

ここではベルリンとブレーメンで幼稚園を見ました。

ベルリンではバスタロッチ・フレイベルハウスを見学いたしました。ここは幼稚園、小学校の先生を養成すると同時に家政婦の訓練もするところです。そして附属の幼稚園があります。即ち、貧困な子や親のない子を社会施設で育てるというバスタロッチの教育精神と、子どもの年令に応じて純教育的に育てねばならないとするフレイベルの精神とを合わせた精神の実現を目指した教育機関であります。

ブレーメンの田舎に行きましたら、どの教育施設も一般に規模が小さく、学校もまた家庭的雰囲気をも出し出さなければならぬとされています。郊外の公立の幼稚園でも規模が小さく、手先の道具を使わせておりました。ドイツ、スイス、オーストリーなどいずれもアメリカのように大きな道具はあまり見あたりませんでした。

時間もなくなりました。まだお話し申し上げたい園がずい分残っておりますが、この辺で終りにいたします。(一九六二・二〇・一〇)